２　探究的な学習の充実

これからの社会を生きる児童生徒が、生涯にわたって学び続け、答えのない問いに立ち向かっていくためには、目の前の事象から解決すべき課題を見いだし、主体的に考え、多様な立場の者が協働的に議論し、納得解を生み出すなど、探究的に学ぶ力を育成することが不可欠である。

さらに、一人一人の社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を育むためには、「社会に開かれた教育課程」の視点から、各学校において、地域や産業界との連携によるキャリア教育の充実を図り、児童生徒に学校で学ぶことと社会との接続を意識させることが重要である。

そこで、県教育委員会では、探究的な学習の充実を目指し、ＰＢＬ（プロジェクト型学習）の考え方を用いた授業改善や「社会に開かれた教育課程」の視点を踏まえたキャリア教育の充実、ルーブリックを活用した学習評価の研究を進めていく。

（１）ＰＢＬ（プロジェクト型学習）の考え方による授業改善

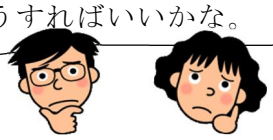
「課題発見・解決学習」をはじめとした主体的な学びの質をより高め、児童生徒一人一人が思考し続けることのできる授業改善の一例としてＰＢＬ（プロジェクト型学習）の考え方がある。ＰＢＬ（プロジェクト型学習）とは、「授業での子供たちの学びをプロジェクトとして組織し、その達成へと促す手法」であり、実生活・実社会の「答えがない問い」を扱い、その解決に向けて探究し、解決策を社会に提案・発信することで、児童生徒の主体的な学びを引き出そうとするものである。

【ＰＢＬ（プロジェクト型学習）の特徴】

○　「答えがなかったり、ひとつの解が存在しなかったり、発展性のあるプロジェクト」を扱う学習。
○　プロジェクトの遂行を通して、他の学習にも応用できる汎用的能力の育成を目指す学習。
○　「社会に開かれた教育課程」の視点で、教科等を横断しながら、実生活・実社会の課題を解決し、社会へ還元する学習。
○　「将来こうなるためにはどうしたらいいのだろう？」と考え、現実と未来のギャップを埋めるような探究を組み込む学習。

探究的な学習における課題とＰＢＬ（プロジェクト型学習）の考え方を取り入れることにより期待される効果の例は次のとおりである。

【課題】	【期待される児童生徒の姿】
課題を自ら見付け、設定する等、課題が児童生徒自身のものとなっていない。	実生活・実社会から、児童生徒自身が解決したい「答えのない問い」にチャレンジする。
目的が不明確で情報収集が、パソコンと本の作業的な調べ学習に終わっているな。	プロジェクトの達成に向けて、児童生徒が情報収集の方法を選択し、パソコンや本に加えて、インタビューやフィールドワーク等、様々な情報収集活動を行う。
あらかじめ教師が学んで欲しいことを児童生徒に順に与えてしまっているな。	教師も答えのない問いに対して、児童生徒と一緒に考え、児童生徒の興味・関心や創意工夫によって、探究の過程を繰り返しながら多様なゴールに向かう。
「まとめ・表現」に対する取組に工夫する余地があるな。	校内の発表に加えて、解決策を専門家や企業、行政機関に提案し、評価を受けたり、社会に貢献する取組を行ったりする。
自らの考えや課題を新たに更新し、次の探究につなげるにはどうすればいいかな。	現実の難しさを実感したり、プログラムを遂行した経験や専門家からのフィードバックを受けたりすること等により、新たな課題が生まれ、探究が繰り返される。

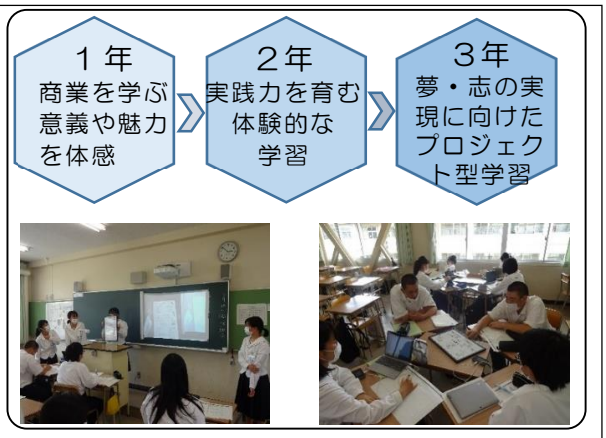


これまでの「課題発見・解決学習」の実践の積み上げの上に、ＰＢＬ（プロジェクト型学習）の考え方を参考にしていくことで、児童生徒の探究的な学習がより一層充実していくと考えられる。さらには、児童生徒や学校の実態に合わせ、「異学年集団による実施」「小グループ等での個別の探究課題の設定」等の学習の形態の工夫や「企業等の出前授業（教育プログラム）の利用」等の様々な資源の発掘と活用等、各校がカリキュラム・マネジメントの中で、考え続けることが重要である。

本県では、令和６～７年度においては、探究的な学びを中核とした「学びの変革」カリキュラム研究開発事業として県内６中学校区を指定し、探究的な学習を行う総合的な学習の時間を軸としたカリキュラムの開発・実践を行った。

【高等学校での事例】

県立商業高校では、学校間で連携しながら、生徒の主体的な学びを促す教育活動を推進するとともに、社会に開かれた教育課程を踏まえ、社会の変化に柔軟に対応できる生徒の資質・能力を育成することを目指し、プロジェクト型学習の要素を取り入れた学習プログラムの開発に取り組んできた。



例えば「人はなぜ生きるのか」「これからの世の中はどうなるか」などの「本質的な問い」を掲げ、生徒が、人としての在り方や生き方という広い視野から、自分を取り巻く環境や世の中の変化に目を向け、「商業を学ぶ意義」や「商業を学ぶ喜び」が感じられる学習プログラムとなっている。

起業家精神育成プログラム
https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/kyouiku/syougyoukyouiku-kigyoukaseishin.html

（２）キャリア教育の充実

参考：本誌　第３章「キャリア教育」　Ｐ３－１

ア　「ミツカル！ひろしまカンパニー」の開設

探究的な学習においては、自己の在り方生き方に照らし、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、自ら問いを見いだし探究することのできる力の育成が求められており、児童生徒に学校で学ぶことと社会との接続を意識させることが重要である。

そのため、県教育委員会では、県内の学校が様々な業種の企業等とつながり、体験活動等を充実させることを目的として、職場体験活動・インターンシップや出前講座などのキャリア教育に協力可能な企業のデータベースを掲載したウェブサイト「ミツカル！ひろしまカンパニー」を令和７年12月に県教育委員会のホームページに開設した。

このウェブサイトは、キャリア教育に協力可能な企業を業種別・所在地別・連携可能な項目別で検索可能なデータベースを備えているほか、児童生徒が自己の職業興味検査等を行うこともできるウェブサイトを紹介している。

各学校において、このウェブサイトを活用することにより、総合的な学習（探究）の時間はもとより、学校の教育活動全体で企業と連携した体験活動が充実することが期待される。

ＵＲＬ：
https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/mitsukaru-hiroshima/

■トップページ（メインビジュアル）

■企業検索画面

イ　小・中学校における取組例

各学校おいて、社会人・職業人として必要な基礎的・基本的な資質や能力を身に付けさせるためには、「卒業時点でできるようになってほしいこと」として、「基礎的・汎用的能力」を基に、キャリア教育を通して身に付けさせたい力を具体的に設定することが必要である。

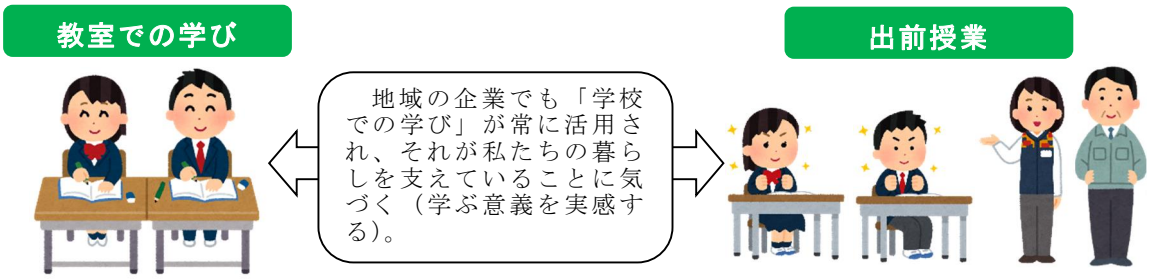
広島県では、「広島県の15歳の生徒に身に付けておいてもらいたい力」として、「自己を認識する力」、「自分の人生を選択する力」、「表現する力」を設定している。

これらの力の育成に向け、本県では令和８年度から、地域に愛着をもち、地域で活躍する人材を育成するキャリア教育推進事業として県内５中学校区を指定し、学習指導要領が示す「社会に開かれた教育課程」の視点を踏まえ、地域や地元企業、近隣の異校種の学校等と協働し、次に示すような職業に関する体験活動を中核とした取組の充実を図ることとしている。

①「出前授業」により、今、学校で学ぶ意義を実感！

身近な地域の方に留まらず、Web等を積極的に活用した産業界の外部講師の「出前授業」を、教科等と関連させながら実施する。

例えば、多様な企業が教育ＣＳＲ（Corporate Social Responsibility：企業の社会的責任）として無料で提供している教育プログラムを利用し、各教科の適切な単元で、外部講師による授業を実施するといったことが考えられる。



②「職場体験」の受入れ先事業所と育成を目指す資質・能力を共有！

中学校では、現在、ほとんどの学校で５日間の職場体験活動が実施されている。そこに「社会に開かれた教育課程」としての視点を加え、職場体験活動を通じて育成を目指す資質・能力を、受入れ先の事業所と学校とが丁寧に共有しながら、実際の職場体験活動を進める。

次に示す岩手県大船渡町の中学校の事例では、企業等の社会的な使命等が生徒に伝わるよう、企業等にプレゼンテーションのテンプレートを提供し、あらかじめその作成を依頼している。各企業において作成したプレゼンテーションを活用したガイダンスを実施していただくことで、生徒は職場体験を通じて自身に身に付けたい資質・能力を意識しながら体験活動に向かっていく。

【事例】岩手県大船渡町の中学校における取組
受入先の企業等に対し，職場体験の開始時に，その社会的な使命等を生徒に伝えていただくためのプレゼンテーションを依頼（テンプレートを提供）

【受入先企業等へ提供するテンプレートの参考イメージ（一部抜粋）】

キャリア教育プログラム開発推進コンソーシアム HP　http://www.career-program.ne.jp/smile/ccd.html

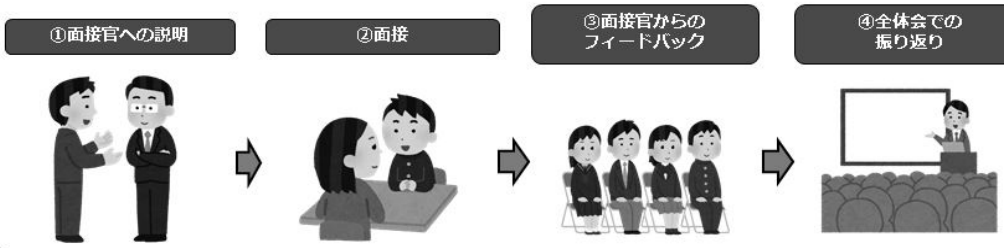
③外部人材による「面接体験」で表現する力を発揮！

次に示す横浜市立の中学校（複数校で実施）での事例では、職場体験活動の受入れ先企業の方に面接練習の試験官を依頼し、面接体験を実施している。初対面の大人の前で、これまでの学びを通じて培ってきた自分の考えをしっかりと表現する機会を設けることにより、生徒一人一人が自分自身の生き方についてさらに深く考えることとなる。

【事例】横浜市立の中学校における取組
職場体験活動の受け入先企業の方を面接練習の試験官に活用！

◆学年　　：中学校３年生（例年12月に実施）
◆面接官　：職場体験先の方,地域の企業の方,町内会長など地域の役員の方　等
◆面接形態：個人面接（時間に余裕があれば、集団面接も実施）
◆質問内容：自己PRや長所・短所，学校生活で努力したこと等の学校が作成した一覧から、面接官が選択して２～３問程度実施。

面接の流れ（例）



地域の外部人材を活用することで・・・

- **初対面の方に対して自己を表現する，貴重な機会となる。**
- **外の方からのフィードバックを得ることで，生徒の自信につながる。**
- **生徒が，面接官から多様な価値観を学ぶことができる。**
- **教職員も面接官から生徒の状況や学校の取組の評価を得ることができる。**

（３）ＳＴＥＡＭ教育の視点を取り入れたカリキュラム開発

令和４年度から実施されている高等学校学習指導要領の趣旨を踏まえ、各教科等の学びを基盤としつつ、多様な情報を活用してそれを統合し、課題発見・解決や社会的な価値の創造に結び付けていくことができる生徒の資質・能力の育成を目指した探究的な学びを充実させるため、ＳＴＥＡＭ教育の視点を取り入れてカリキュラムの質的向上に取り組んでいる。

複数の教科等の見方・考え方を総合的・統合的に働かせながら、文理の枠を超えて実社会の課題を取り扱い探究する活動を充実させることを目指すものである。

（４）高等学校におけるルーブリックを活用した学習評価

本県では、令和３年度より教育目標に基づき、生徒に身に付けさせたい資質・能力を明確化し、具体的な生徒の姿を見取るためのルーブリック（学校全体で育成する資質・能力のルーブリックを「マスタールーブリック」と呼ぶ）を各学校で作成し、活用していくことを通して、指導の評価・改善につなげていくことに取り組んでいる。

【ルーブリック作成及び活用の手順の一例】

① 生徒の現状を踏まえ、学校全体で育成する資質・能力を設定する。

② マスタールーブリックを作成するに当たっては、育成する資質・能力について、卒業時に到達する基準を決めて段階を設定する。

③ ②で作成したマスタールーブリックをもとに、各教科や総合的な探究の時間、特別活動等において、単元や１時間ごとの授業のルーブリックを作成する。

④ ルーブリックを活用して生徒に学習の到達度を確認させ、次の学習への見通しをもたせる。

【呉宮原高等学校の事例】

（作成したマスタールーブリック）

尺度 資質・能力	レベル１	レベル２	レベル３	レベル４
≪自律≫ **様々な意見や情報を踏まえて，自分の力で考え適切に判断し行動することができる。** ①（読解力・情報リテラシー） ②（自己管理能力）	自分の力で考え判断して行動しようとしている。	自ら考え判断して行動している。	他者の意見や様々な情報を踏まえて，自ら考え判断して行動している。	内容を十分に理解した上で取捨選択した他者の意見や情報を踏まえて，自ら考え判断して適切に行動している。
≪挑戦≫ **高い目標に果敢に挑戦し，粘り強く努力を続けることができる。** ①（プランニング能力） ②（チャレンジ精神） ③（継続力）	様々な場面や将来の進路について，自らの目標を設定しようとしている。	学校生活の様々な場面や将来の進路について，自らの目標を設定することができている。	学校生活の様々な場面や将来の進路について，高い目標を設定し，その実現に向けて挑戦している。	学校生活の様々な場面や将来の進路について，高い目標を設定し，その実現に向けて計画的に努力を続けている。
≪貢献（社会性）≫ **他者を思いやり協力して行動することにより，仲間や学校・地域に貢献することができる。** ①（他者受容・思いやり） ②（協働しようとする態度） ③（課題発見・解決能力）	他者の存在を認め，思いやりをもって行動しようとしている。	他者の存在を認め，思いやりを持って行動している。	他者の存在を認め，思いやりを持ちながら，協力して行動することができている。	仲間や集団，学校・地域の課題に対して，他者と協力しながらその解決のために取り組んでいる。

≪自律≫
①（読解力・情報リテラシー）＝他者の意見を素直に受け入れるとともに様々な情報を自ら収集して，それらの内容を理解した上で適切に取捨選択することができる。
②（自己管理能力）＝他者の意見や収集した情報を踏まえて，自ら考え判断して適切な行動をとることができる。
≪挑戦≫
①（プランニング能力）＝自ら目標を設定し，その目標達成のための行動計画を立てることができる。
②（チャレンジ精神）＝自ら定めた目標に果敢にチャレンジしている。
③（継続力）＝目標達成に向けた努力を継続することができる。
≪貢献（社会性）≫
①（他者受容・思いやり）＝他者の存在を認め，思いやることができる。
②（協働しようとする態度）＝他者と協力して行動することができる。
③（課題発見・解決能力）＝自ら課題を設定し，その解決のために取り組むことができる。